



# 原典で読む 外国人が見た日本

高橋知明

(瀬田玉川神社補正)

## 第十回 ラザフォード・オールコック『大君の都』(下)

「ヨーロッパにはこんなに幸福で暮らし向きのよい農民はいない」

オールコックは、民衆の生活にも着目し、幕府は將軍の専制政治でありながら幸福な国民生活をつくり出している、と見て高い評価をしています。

「自分の農地を整然と保っていることにかけては、世界中で日本の農民にかなうものはないであろう……日本の農民の技術や勤勉さや慎重さを減じはしない。男や女や子供たちが、朝早くから夜遅くまで田畑にいるのを見かける」

「封建領主の圧制的な支配や全労働者階級が苦勞し呻吟させられている抑圧に

ついては、かねてから多くのことを聞いている。だがこれらのよく耕作された谷間を横切ってひじょうなゆたかさのなかで家庭を営んでいる幸福で満ち足りた暮らし向きのよさそうな住民を見ていると、これが圧制に苦しみ、苛酷な税金をとり立てられて窮乏している土地だとはとても信じがたい。むしろ反対に、ヨーロッパにはこんなに幸福で暮らし向きのよい農民はいないし、またこれほど温和で贈り物の豊富な風土はどこにもないという印象をいだかざるをえなかった」



オールコック

のごとくかかとのうえにすわって、畳からわずか数インチの高さの脚付きの小さな漆器の盛り皿で食事をし、また頭ぐらいの大きさの漆器か木製の枕で床の畳のうえに寝る。かれらは、かれらの祖先のスパルタ的な簡素さを保ち、米と魚の同じような質素な料理に甘んじて、かれらの富を吸収したり元気を奪うような外国のぜいたく品を必要としないということに本当によるこんでいるのではあるまいか」

権力者でも贅沢を好まず、シンプルな生活と機能的な建物に住んでいること、またその中にいる家臣たちの規律と礼儀正しきにも深く感銘しています。



オールコックの日本での事蹟を語る上で、外せないことの一つに、彼が初めて富士山に登頂した外国人だということがあります。このことに関しては、日本の何かに感心したというより、日本人の尊崇と敬愛の対象である富士山とその信仰を冒瀆するような行動をしています。彼が登山を開始したのは、万延元年(一八六〇)七月二十五日のことです。大変な疲勞をしながらも頂上に至った彼は、一行の一人に火口の測量をさせています。

「この噴火口はつき出たくちびるをもつ大きな長円形をなしており、ロビンソン大尉が知っているかぎりの測量方法をつ

くして算定したところによると、長さは約一〇〇ヤード、幅六〇〇ヤード、深さは約三五〇ヤードだろうということがあった」

また、『大君の都』に記された内容ではありませんが、一八六〇年十一月二十九日付の『The Times』紙に、一行の一人がこの登頂について寄稿した内容に基づく記事が掲載されています。それによると、彼は山頂にイギリス国旗を掲揚しました。そして、噴火口に向けピストルを五発撃つて範を示すと、他のメンバーもそれに倣い、「国旗に敬意を表するため……計二十一発になるまでにピストルを発射して礼砲に代えた。それから……イギリス国歌(God Save the Queen)を唱和し、最後に『恵み深い女王陛下の健康』を祝して、富士山の雪で冷やしたシャンパンで乾杯した」というのです。

日本人にとって山は信仰の対象の一つであり、人間の靈魂は山からやってきて身体という箱に入り、死ねば山に帰っていくという靈魂観があるほどです。そう

「この火山の多い国土からエデンの園をつくり出し、他の世界との交わりをいっさい断ち切ったまま、独力の国内産業によって三千万と推定される住民が着々と物質的繁榮を増進させてきている。とすれば、このような結果が可能であるところの住民を、あるいはかれらがしたがっている制度を、全面的に非難するようなことはおよそ不可能である。わたしは、専制主義や日本政府を弁護しようとしているのではなくて、一ヨーロッパ人旅行者として自然にいだく感想を述べているのである」

「エデンの園」と表現するほど、国民の幸福度の高さについて、ほとんど世界に類をみない稀有の国だと感じたようです。同時に自らの任務により、それを侵すことに罪悪感もあつたかもしれません。

また、彼は將軍に謁見できる数少ない外国人の一人でしたが、そこで感じた江戸城内の佇まいに目を見張っています。

「わたしは宮殿のなかで見たすべてのものの秩序と礼儀の正しさに心を打たれたといいたい。接見の場の事物は秩序整然としているし、装置の一般的な簡素さはほかに例がない。部屋や回廊にはすこしも家具がおかれていない——日本の貴族は、かれの農奴ないし臣下と同じく、例

したことからか、山には大きく二つの区域があり、人間が材木を伐り出したり、キノコを採種したりと、生活のため最低限の利益を得る里山に対し、人間が侵してはならない神々が宿る聖域の奥山があります。そこは深い森があることで鳥獸類や植物の生物多様性が保護され、急勾配の国土でも保水力のある山に保たれていました。しばしば里山と奥山の境界には神社や祠が存在し、自然と共生する先人からの戒めと知恵を大切にしてきた表れとも考えられます。

ましてや「靈峰富士」に外国人が登山したことだけでも当時の日本社会に与えた波紋は一つの事件であつたかと思われまます。にもかかわらず、火口で測量を行い、英国旗を立て、あまつさえピストルを撃つなどという行動は、攘夷論者や富士山信仰者らを激憤させたに違いありません。

もつとも、山をはじめ自然界には神々が宿ると考え、自然と人との共存共榮に努めてきた日本人に対し、西欧では自然は征服するものという考え方があるほどです。軍勢力を背景に、世界の各地で資源を奪い取り、自国の領土を拡大してきた欧米列強の帝国主義から、「エデンの園」を捨て急速な近代化を図ることで日本を守らなければならなかつた、幕末の先人達の苦勞に思いを致さざるを得ません。